

## BATTLE GREEN 21

月十八日午前四時、吹雪の悪夢がまだ臉に残っていた私は窓から外を見て同じ風景なのに驚いた。今日は、MLK Jr. 記念行事が行われる大切な日である。

銃弾に倒れたキング牧師が達成した人権運動をたえるこの記念行事は、もともとLexington Coalition for Racial Equalityというグループが十六年前に始めたものである。だが創始メンバーの高齢化と後継者不足で企画が困難になり、二年前からLexington No Place For Hate (以降LNPFHと省略) が実際の運営を引き継いだといういきさつがある。ネットの天気予報では積雪は六、九インチに達するという。

この天気では誰も来ないのではないか。ポリスカーの先導で行うユニティ行進はできるのか……。

午後二時、すでに積雪は九インチ近いように思えたが、雪を頭に載せたミニットマンの銅像脇に集まったのはいつもとほとんど変わらぬ顔ぶれだった。私たちが行進を始めるやいなや、町の角で戦争反対のデモンストレーションをしていたグループが小走りに行進の後尾に加わったのも愉快なオマケだ。ゆっくり歩く私たちの後ろを、運悪く行進の時間に出くわしてしまつた車の行列が続く。行政委員のマンツが「ほら後ろを見てごらん。車が並んですごい行進に見えるから」と言うので行事専任カメラマンとしてなるべく立派に見える写真を撮つた。溶けた雪で膝まで濡れてもちつとも寒いとは感じなかったのは、子供のころ雪の中で遊んだ感覚だつたからだ。

\*\*\*

大統領就任がそれぞれにとって意味すること、「キング牧師が夢見た将来とオバマの当選との関係」、「この国の将来」といったテーマで話し合う。時間はいくらかあつても足りない。多くの出席者はキング牧師とケネディ兄弟の暗殺があつた暗い時代を覚えていた高年齢者たちだ。アフリカ系アメリカ人はさほど多くないが、人権運動にかかわってきた人々の「つい涙が出た」というオバマ当選の体験談には親密感を覚え、知識人たちによる歴史の解説や未来展望は外国人として歴史や政治の勉強になった。

だが、出席者のうちひとりだけが私を複雑な気分させた。ベニー(仮名)が訴えかけるような目で見ていたので笑顔で応じたが、彼女が何を求めているのかわからない。一年半前の出来事を思い出すと、それを採し出すのも気がひける。

\*\*\*

## バトルグリーン/連載エッセイ21

### 渡辺 由佳里

## それでも信じるほうを選ぶ



校を二組の親が訴訟したときに闘ったのはLNPFHである。そのドミノ効果で町が白人優先主義のハイトグループのターゲットになったとき、町、警察、学校、住民をまとめて対応したのもLNPFHである。そのとき私たちが守つた同性愛の親のひとりで、グリーンでの集会で涙を流して、「この町に住んでよかった」と演説したのがベニーだった。

さて次はADLと米アルメニア人団体の関係である。これには非常に複雑な歴史と国際政治絡んでいて、一九一五年〜一七年のオットマン帝国(現在のトルコ)によるアルメニア人虐殺は、正式には「genocide」と呼ばれておらず、米国下院にトルコ政府に「genocide」と呼ぶことを要求する採決を下させることが米アルメニア人の間で第一目標になっていた。一方で、イスラム教の国の中では最も親イスラエルのトルコ政府を刺激する行動を避けるために米アルメニア団体は痺れを切らせていた。そこで、ADL全国組織に政治的圧力を加えるために、地方自治体にLNPFHプログラムを切り捨てるよう要請する戦略を決めたのである。

LNPFHがADLに政治的プレッシャーを与える道具に決まった時点でLNPFHは死刑宣告を受けたようなものだったのだが、私たちには知る由もなかった。

\*\*\*

LNPFHプログラムを作ったニューイングランド支部のADLは最初から「genocide」と呼んでいたし、数々の成功を収めてきたLNPFHは町にとって有用なグループだった。私たちは町の米アルメニア人と話し合おうとしたが、戻ってきたのは敵意に満ちた攻撃のみだった。レキシントン町の行政委員たちも最初のうちはこのプログラムを手放すつもりはまったくなかった。しかし、会議のたびに近隣の町から押し寄せる米アルメニア人の数と、高齢者に虐殺のむごい歴史を語らせて感情的にADLとそれが運営するLNPFHを攻撃する戦略、そして新聞を利用した住民感情のコントロールに疲弊を覚えたようだ。

存続を決めるために十一月に行われた行政委員会会議の席はあまりにも米アルメニア人の数が多くてキャリーホールを使うことになった。皮肉なことに、MLK Jr. 記念行事と同じ会場である。その夜、まるでわれわれLNPFHが直接「genocide」を行つたかのような糾弾の嵐の後、マイクを持って立ち上がったのがベニーだった。

以前私たちに感謝をしたときのようには涙を浮かべたベニーは、驚くことに「こんなに気の毒な人々の気持ちは無視できない。町はLNPFHと手を切るべきだ」と言つたのである。隣に立っていたLNPFH運営委員会のメンバーが「ベニー、彼らは将来あなたを守つてはくれないわよ」と独り言をつぶやいたのが今も耳に残る。

\*\*\*

LNPFHはこうにして切捨てられ、それ以降には同じようなグループは作られていない。そしてイラク戦争や選挙、不況、などの差し迫る問題のために現在「genocide」の本会議での採決に興味を持つ下院議員はほぼ皆無だ。何のためのキャンペーンだったのか？

目前に迫るMLK Jr. 記念行事のことを考えたらおちこんでいる暇はない。私たちはLNPFHの名をプログラムから取り去り、MLK Jr. 記念行事実行委員会として計画を続けた。

だから、今年も雪くらいで負けたりはしないのだ。ベニーはどう思っているのかわからないが、私は彼女を憎んではない。彼女を含め多くの人は理性ではなく感情でものを考える人を知っているから。オバマ大統領の誕生は、米国民に理性でものを考えるきっかけを与えてくれるかもしれない。いや、そうあつてほしい。

わたなべ ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。  
<著者のブログ>  
<http://watanabeyukari.weblogs.jp/>